

人権さんだ

1 月号

令和6年(2024)

No.538

じんけん
人権作文

《問い合わせ》
共生社会部福祉共生室人権共生推進課
TEL: 559-5148 FAX: 563-7776
E-mail: jinken_u@city.sanda.lg.jp

人権と共生社会を考える
市民のつどい

プログラム

◆人権標語・ポスター

優秀賞表彰

◆ラブピース4コマまんが

特選表彰

◆市内小・中・高校生による

人権作文発表

◆講演

「いまあらためて部落問題を考える」

～インターネット上の部落差別を

めぐる現状と課題～

講師: 北川 真児さん

【優秀賞】
「誰にでも あるといいな
心の居場所」

PTA・一般の部

玉田 勝世さん

(たまだ かつよ)



人権標語 表彰式の様子

子どもたちからの

メッセージ

子どもたちは、学校や地域社会で様々な人と出会い、多くの体験をしています。嬉しい体験や楽しい出会いもあります。子どもたちにとってつらい体験もあるでしょう。様々な出会いの中で考えたことや気付いたことを、自分なりにまとめて発表したり作文にまとめることで、自分自身の心を見つめる機会となり、子どもたちは成長していきます。

今号は、市内の小学生・中学生・高校生が書いた人権作文を掲載します。

子どもたちの素直な感性から、私たちがどのようなことに気づかされるでしょうか。

いずれも、12月2日(土)に三田市総合文化センター(郷の音ホール)で開催された「人権と共生社会を考える市民のつどい」において発表された作文です。

当日は人権作文発表の他にも人権標語・人権ポスターなどの表彰や部落差別について考える講演会も開催されました。

UD FONT

見やすいユニバーサルデザイン
フォントを採用しています。

“自分”を生きる

三田松聖高等学校2年

桑迫 留花さん



最近、よく耳にする「ジェンダー」という言葉。「ジェンダー」とは、生物学的な性差とは違い、社会的、文化的に作られた性差のことだ。「ジェンダー平等の実現」は、国連が定める「SDGs」の17の目標のうち5番目に掲げられ、国際的にも取り組まれている。「ジェンダー」

の枠をはずして、もっと色んな価値観が世の中に広がり浸透していけばいいのに、と私は考える。

幼い頃から、私はスカートがあまり好きではなかった。特に理由はないが、ただ何となく、スカートやヒラヒラとした服を身にまとうことを好ましく思っていなかった。しかし、中学に上がると制服になり、私が好む好まざるにかかわらずスカートを履かなければならなかった。今や女子のパンツスタイルはファッションとしても当たり前のように認識されているのに、制服となると世の中の固定観念に縛られなければならない。私は違和感を覚え、やるせない気持ちになった。

成長するにつれ、様々な場面において男女別で行動することが多くなった。そこにまたやりづらさを感じ、少しずつ疑問を抱くようになっていった。自分のことも名前と呼んでいたのが「わたし」と言うように言われ、変えていった。座り方、言葉遣いと、何かにつけて「らしさ」を求められ、押し付けられることが増えていき、息苦しさを覚えるようになった。

中2の時、祖母が、「女の幸せは結婚だ」と言っているのを聞いた。祖母がどのような意味で言ったか、その真意まではわからないが、そういった言葉を聞いた瞬間、「自分」というものが押しつぶされていくような、何とも言えない気持ちになった。それ以来、男女という二元的なとらえ方しかできない人を見ると、より一層強い苛立ちのような感情が湧いてくるようになった。なぜそんな気持ちになるのか、よくわからなかった。ただ、自分の中で釈然としない何かがあって、無性に腹が立ったり腑に落ちなかったりすることが増えていき、私は、次第に「自分」というものが分からなくなっていた。

そんな時に出会ったのが、保健室前に貼ってあった「SOGI」(※)と

(※) 性的指向 Sexual Orientation 性自認 Gender Identity

いう見出しのポスターだった。そこで初めて、性別における多様な価値観が存在してよいことを知った。そして、興味を持ちたくさん調べた。すると、わからなくなっていた自分の心の中が見え始めた。自分という存在を、男女どちらかでカテゴライズするような狭い世界に閉じ込めてほしくない、もっと広い視野で1人の人間として見てほしい。私はそう考えている人間なのかもしれない、ということに気づいた。胸にあったモヤが、一気に晴れた。私がこれまで感じてきた違和感は、その現実とのギャップだったのだ。「自分」の事を少し理解できた気がした。

現実とのギャップは高校生になっただけからも続いた。入学前、制服のスカートとズボンを選べると聞き、すかさずズボンにしようという頼んだ。しかし、実際は女子がズボンを希望するケースが初めてだった。一方で、女子仕様のズボンとシャツがまだ作られていなかった。そのため、私への異例扱い感が凄かった。採寸の時に随分と時間がかかった上、ズボンのサイズが違い買い直すことにもなった。夏服のシャツはとりあえず試作中のものを着ることにしたが、女子用は男子とは少し違う着こなしであったため、色々な先

生に廊下で会うたびに注意を受けた。先生たちの間で周知されていなかったのだろうか、私はそのたびに1人1人の先生にいきさつを説明するのがイヤになった。それでもまだ、スカートを履くことを思えばマシであるが、本来ならばこのようなストレスを感じる必要はないはずだ。「制服、選べます」とは言ったものの、それは世間の流れに合わせた建前であって、実は何も準備できていなかったのでは？と疑念を抱いてしまった。

「ジェンダーの平等」を実現するために「多様性の尊重」が重要だと言われている。しかし、世界経済フォーラムが公表したジェンダーギャップ指数では、教育・健康分野はトップクラスであるが、政治・経済分野においては先進国の中で最低レベル、そしてアジア諸国の中でも遅れが見られるという結果で、現状は遅れている。それに対して様々な改善策が取り組まれているようであるが、私の身近な体験一つを取り上げてみても、世代を超えて多様性を認め合える社会を目指すには、随分と時間がかかりそうだ。

私にできることは、「自分」の本当の心を知り、しっかりとしたアイデンティティを確立することだ。

そう考えてはいても、世間の同調圧力に屈してしまい、実際行動に移すにはまだまだ難しいのが現状だ。けれど、私は、「自分」としての考え方ははっきりと表現できる人でありたい。それと同時に、相手の考えにもきちんと耳を傾けられる人でありたい。そのためには、自分の持っている基準だけに完結せず、周りの多様な価値観を認めながら、異なるものを含めて切磋琢磨し合い、「自分」を生きていきたいと思っている。

命の大切さ

長坂中学校1年

酒見 都希さん

私の母は、五年前に亡くなりました。

私の母は、料理上手で、運動神経が良く、手先が器用で、おしゃれ好きでした。そして、毎日私を笑わせてくれる自慢の母でした。

私が小学校一年生の時のことです。夕食の後、両親から急に話があると言われました。あんな真剣な両親の顔を見るのは初めてで、これはただ事ではないと思いました。夕食後、母が泣きながら「ママの体に悪いものがあって、やっ

つけないといけないから入院することになった。みんなに迷惑をかけるけど、「一緒に頑張ろうな」と、一年生の私にもわかりやすい言葉で、病気について話してくれました。私は母の話を聞いた時、「悪いもの？それって何？これからどうなるんだろう」と、わけが分からず、ただ怖くて大泣きしました。

その日から、私たち家族の生活はがらりと変わりました。母は最初の頃は元気でしたが、病院での治療が始まると苦しそうで、いつもの元気な母の姿はなく、まるで別人のようでした。私はそんな母を受け入れることがなかなかできませんでした。姉は、「ママ大丈夫がんばって」と、励ましていました。しかし、私は別人のようになつた母を見るのが怖くて辛くて、病室に入る勇気がなく、祖母と待合室にいました。

そして母は乳がんの手術をしました。私はその傷口を見た時、やっとな現実を受け入れることができなくなりました。母のがんは次から次へと転移していききました。どんどん悪化していき、人工肛門をつけて家に帰ってきたときは、本当にショックで今でもはつきり覚えて

います。

私は、なぜ母がこんなに苦しい思いをしないといけないのか。「なぜ私の母だけ病気になるの」と、やりきれない気持ちでいっぱいでした。母は抗がん剤治療の影響で髪が抜け、まつ毛も抜け、ウィッグでの生活が始まりました。しかし、母はそんな時でもいつも私に笑顔で、優しく接してくれました。

その後、母は余命宣告を受けました。「えっ、絶対ウソやん、あと一年で亡くなるなんて、そんな無理や・・・」その日から家族みんなで協力し、母との生活をより大切にしていきました。家族みんなでの最後の旅行は沖縄へ行きました。

その後、母の病状が進み、母は末期がんになり、ついに緩和ケアに移りました。最後は会話もできなくなり、二十十八年十月二十日、母は天国に旅立ちました。

私は、母を亡くしたことで命の大切さを学びました。私の母のように病気で苦しんでいる人や生きたくても生きられない人はたくさんいます。だから、自ら命を絶つことは絶対にしてほしくないと強く思います。日々の生活

の中で、いじめにあつたり、辛いことがあつたりして、死にたいと思うことがあるかもしれません。私も、友だち関係で悩むことがあります。そんな時は誰かに相談すると、悩み事は解決し心が軽くなり、元氣が出ます。だからみなさんも辛くて逃げだしたい、人生に疲れて死にたいと思つたら周りに相談して一人で悩まないでください。私は、母に心配させないよう、命を大切にし、強く母の分まで生きていきたいです。大切な命、命の尊さをもっとみんなにわかってほしいです。

令和5年度 人権ポスター・標語受賞作品



すずかけ台小学校 6年
京極 志歩さん

●ぼくわらう
ともだちわらう
わっはっは
志手原小学校 1年
田村 洸樹さん

「心はつながってるよ」



すずかけ台小学校 2年
岡田 真依さん

親しき中にも礼儀あり

学園小学校6年

中川 怜さん

いじめと言われて私は、なるべく・けるなどの暴力や、集団による悪口などを思い浮かべます。けれど、友達をふざけて冷やかしたり、いじったりすることは、いじめとは考えていませんでした。ですから、自分は、いじめをされたこともない、したこともないと思っていました。学校でするいじめアンケートでは、「自分には関係ない」と思いながら答えていました。いじめに関するニュースを見たときも「いじめはいけないことだな」と思いながらも、どこか他人行儀な、よそよそしい態度をしていたと思います。ですが、いじめは身近にあることに気づく出来事がありました。

私には、友達がいます。その友達と私は、なやみを相談できる仲間でもあります。互いに軽口を言い合うこともある関係です。ある日、その友達と他の人数人で、男友達を軽い気持ちで冷やかしました。その後、その友達は、泣いてしまいました。私はその時、「こんなことで泣くものなのか？」と疑問に思いましたが、その日はみんなであやまって解決しました。ですが、問題はそれから一ヶ月ほどたった日でした。私はその日、冷やかされて泣いてしまいました。もともと私は、前から冷やかされていましたが、その時は「前〇〇のことが好きやろ！」と一言言われる程度でした。ですが、その日はちがいました。私を囲む人が、一人ひとり私を冷やかしてくるのです。その時に、私の友達がいたのは少しショックでした。が、またすぐに終わるだろうと思

い、いやな思いはあったけど、空気をこわさないように笑いながら冷やかしが終わるのを待っていました。ですが、冷やかしは一向に終わらず、私はつらくなって、ついに泣いてしまいました。その時私は、やっとこの間自分が冷やかした男友達の気持ちがわかった気がしました。集団でいじられるのは、こんなにいやな気持ちになるのだな、軽い気持ちで相手をしていって、仮にいじられた人が笑っている、本心では悲しい気持ちになっているのだなと思えました。その時私は、いつも軽口をたたき合っている友達のことを思い出しました。私も、その友達を冷やかしたことが少なからずあります。その時、友達は笑っていたけれど、内心では傷ついていたのかもしれない。

このような経験から私は、いじめは暴力や悪口だけでなく、度を過ぎた冷やかしいいじりもいじめになるのだなと思えました。いじめに関して自分に関係ないと思っていました。が、相手を冷やかしたりしているうちに、いつの間にか加害者になっていたり、被害者になっていたりしたのかもしれないと思えました。そして、冷や

かしなどのいじめは、悪口を言われるよりたちが悪いなと思えました。なぜなら、冷やかしている側に罪悪感がない場合があるからです。みんなが楽しんでいたら「やめて」と言えなくて、ためこんでしまうかもしれないからです。ですから、これから私は、発言する前にその言葉を聞いて相手がどう思うかということを考えて、「親しき中にも礼儀あり」を心がけていこうと思えました。



くらしの人権相談

TEL 559-5062 FAX 559-5063
月曜～金曜 9時～17時（※祝日・年末年始を除く）

専門相談員による性的マイノリティ特設電話相談（予約）

TEL 559-5062 FAX 559-5063
月曜～金曜 9時～17時（※祝日・年末年始を除く）
※専門相談員との相談日は予約後に調整

人権擁護委員による定例人権相談（予約）

TEL 559-5148 FAX 563-7776
《次回相談日》1月25日（木）13時～16時